

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 唐代の艶情小説：才子と佳人   |
| Sub Title        | Love romance in Táng dynasty : The wise and his lover   |
| Author           | 新谷, 雅樹(Shinya, Masaki)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学藝文学会  |
| Publication year | 1981  |
| Jtitle           | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.42, (1981. 12) ,p.113- 137  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00420001-0113">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00420001-0113</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 唐代の艶情小説

——才子と佳人——

新 谷 雅 樹

一、はじめに

中国の旧社会の、いわゆる恋愛小説および恋愛劇は、題材上から見て、才子佳人の属が過半を占める、ところ言っても言い過ぎではないだろう。

ひとくちに才子佳人の主題と言っても、それはたいへん人気のあるテーマで、なおかつ非常に長い間、人々に愛好されてきた。

この種のテーマは、主として小説戯曲の中で、飽くことなく繰り返されてきたが、それが本格的な様式、言い換えると、小説らしい体裁を取るにいたったのは、唐代の頃からである、と一応こう考えてさしつかえない。

もとより唐代は、中国小説史上記念すべき時代で、いささか言い古された評語ではあるが、このとき詩律と並んで、「一代の奇」（宋・洪邁）と評される、新たな小説のジャンルが発生する。

それは一般に「伝奇」と総称され、いまだお話し、の域を出ない、従前の志怪・志人小説にくらべると、プロットらし

いプロットを備え、ぐっと物語的な性格を帯びてくる。

この伝奇小説の主要なテーマの一つが、恋愛であった。

なかならず佳人才子の恋愛譚（いわゆる艶情伝奇）は、ようやく六朝志怪の余習を脱して、作中には一般の人性を備えた男女が登場する。これらの恋愛故事の中には、その恋のゆくえの如何にかかわらず、本気で恋をする女がいたり、男がいたりしたものだ。そして、かかる男女の悲歎離合を通じて、人間というものの認識に到る道をさぐるうとする試みも、他ならぬこの種の小説の眼目であった。

その代表的な作品が、『霍小玉伝』であり、『李娃伝』であり、『鶯鶯伝』である。<sup>(1)</sup>

もちろん、「才子」とか「佳人」とかいう呼称は、唐以前にも古くから存在した。しかし、「才子佳人」と併称されるような、一組の望ましい男女が、物語の中に生きるようになったのは、唐代の伝奇作者の創意や趣向に俟つものと思われる。

そして、かかる才子佳人の物語の様式、ないし唐代伝奇中の艶情の概念は、後世の戯曲小説の有力な主題となり、時にはそのままの形で、時には形を変えて、根強く生き残る。が、それは基本的に言って、さほどの変容を蒙らずに、宋元を通じ、特に明代における盛行を経て、清末の鴛鴦胡蝶派に至るまで、ざっと勘定しただけでも、ゆうに一千年にしろかという永きにわたって踏襲されつづけてきた。

それはまことに、特殊な発展と謂うしかないだらう。その旧套に飽食しない精神には一驚を喫せざるを得ないが、いや、むしろ中国人は、好んでこれらの物語を語りつづけてきたのである。

それは一体、いかなる種類の共鳴を人々の心の中によびさすのか。

これらの物語の異常な成功からみても、才子佳人という主題には、中国人の心の琴線にふれる、何かがあるらしいことは明かである。

鴛鴦といい、比翼といい、連理という、何事にもまれ中国人は、物事を対偶を以て理解し把握するならいだが、要するに、才子佳人という極く好ましいシンメトリーは、そのような思考様式をもつ人々にとって、まさに恰好な恋愛の主題だったのではあるまいか。

## 二、神話から世俗へ

まだ唐初の清新の気あふれる則天武后の治世（六九〇—七〇五）に、あえて通俗をおそれぬ、したたかな輕薄才子がいた。その名は張鷟（字は文成）。この驕兒の型はずれな小説『遊仙窟』は、彼の才名を一時に冠絶させるに足るものだった。

しかしながら、周知のように、古くから我が国にも舶載され、いまなお現存するこの小説は、中国本国ではかえって早く佚書となっている。

このため、中国小説史上孤立した作品と目されがちだが、ここでは、六朝の志怪から唐の伝奇にいたる過程に出現した過渡的な小説である、という文学史的事実を確認しておけば充分であろう。また、これより後、中晩唐の頃に黄金期をむかえる唐代伝奇中、とりわけ艶情類の作品の先蹤と考えられる、ということに対しても、若干の注意を払っておこう。

さて、この『遊仙窟』に目を通すと、まず駢文体の叙述の派手さ、神人相恋の物語の絢爛さに眩惑されがちだが、こ

の小説の舞台「神仙の窟」において交わされる主人公たち（下官文成と仙女十娘）の閨情は、かえって生々しく、俗間の男女のそれと寸分もたがわない。こういう淫蕩な特色のために、この書は従来、淫書のひとつに数えられてきた。

とはいえ、主人公たちの恋愛が、選ばれたものたちの恋愛であることは確かである。

「向ニ称揚セラレントキ、謂ヘラク言ノ虚假ナラント。誰カ知ラン、面ヲ對スルトキ、恰モ神仙ナラントハ。此ハ是レ神仙ノ窟ナリ」

と、文成が言うと、

「向ニ詩篇ヲ見シトキ、謂ヘラク凡俗ニ非ラズト。今玉貌ニ逢フニ、更ニ文章ニ勝レタリ。此ハ是レ文章ノ窟ナリ」<sup>(3)</sup>

と、十娘が答える。

この際立つて対照的な恋人たち。男は誰よりも才識非凡、女は誰よりも容姿秀麗、その限りでは、二人の恋人の心理的肉体的特徴は、才子佳人のそれとほとんど懸隔はないと言っている。

けれども、二人の色恋沙汰は、至って退屈である。おびただしい詩の応酬によって進行する冗漫なロマンス、やがて訪れる快樂を極端に強調した濡場、そして型通りの感傷的なきぬぎぬの別れ。——こうした他愛もない筋書の裏には、誰にでもそれと分る通俗性がある。

したがって、仙境という彼岸の舞台設定も、ここではすでに意味を失い、結局のところ、近来の研究が教えてくれるように、いわゆる「神仙の窟」なるものも、単に世俗の遊里の仮想にすぎないことが識られよう。

いま仙女十娘の素性は、ことさら問うまい。ただ、これからしばらく注目したいのは、この『遊仙窟』に見られるよ

うな神人婚媾の主題についてである。

唐代の散文物語を通観すると、神女と青年とのロマンスの主題も、当時そう日新しいものではなく、むしろありふれたものにすぎなかった。

試みにその祖型をさぐると、それは遠く『楚辞』の女神探求の主題に求められる。およそ文献に徴し得る限り、これがいわゆる神婚説話の原型であるが、その起源はといえば、『楚辞』の宗教的性格から考えてみても、おそらく、古代シャーマンの神おろしの習俗より発したものであろう。宗教が祭祀という直截な行動であった古代人にとって、神との恍惚とした一体化の感受とともに、祭儀の高潮がおとずれるとするなら、神への求愛はすなわち、美意識以前の、直接感覚に訴える、最も始源的な祈禱の情熱であつたに違いない。

ところが、『楚辞』を経て伝承されたものは、そうした原始信仰そのものではなく、むしろ文学の様式としてであつた。すでに屈原の賦においてすら、女神たちには、文学的紛飾がほどこされているのである。

そしてさらに、秦漢の神仙説の流行を経て、南朝風の貴族趣味が風靡するにいたると、特権的な存在であつた女神たちも、しだいに人間化し世俗化して、その肉体的属性は、霊的なものから、より誘惑的なもの肉感的なものへと変貌してゆく。

なかでも西王母は、最もあざやかな変身ぶりを示した。この上代に信仰された女神は、たとえば『山海経』（西山経）の中では、半人半獣として描かれていた。「豹尾虎齒ニシテ、善ク嘯キ、蓬髪ニ勝ヲ戴ク」ところが、この容易に近づきたい、邪悪な相貌をもつ半獣神も、時を経て絶世無双の美貌を勝ち得、あまつさえ人間の帝王と交歓するまでにいたる（たとえば『漢武内伝』<sup>(4)</sup>など）。

もっとも、だからといって、神々が人間の欲求をやすやすと受け容れたという訳ではない。『楚辞』以来の神婚説話の正系を踏むといわれる、宋玉の「高唐賦」であれ、曹植の「洛神賦」であれ、神と人とのなまめかしいやりとりはあっても（それは大抵、曖昧模糊とした形で示されるが）、結局、神人の恋は成就されるまでには至らない。『楚辞』以来、これが聖なる神婚の本質なのである。

この他にも、これより高踏的ではないにしても、それでも人を魅了してやまないものに、謫仙の題材があった。いまは女仙の場合に限ることにするが、この中国の美しい天衆たちは、汚濁に満ちた俗界に降り立つことも一再ではなかった。多くの場合、仙女たちは天界で罪を得て、この地上に配流される。その滞留期間はそう長いものではないが、仙女たちの天界における失寵は、この地上での役割をほぼ決定しているようだ。というのも、大体において、仙女たちが人間界の異性と（性的なものも含めて）何らかの交渉をもつ点では、ほぼ一致しているからである。

こうして見てみると、神人相恋の主題には、人間のいささか邪な愉悅が、微妙な翳を落していることに思いあたる。そこで美化され理想化されているのは、もっぱら人間の官能なのである。とすれば、女神の人間化とは、逆に現実の女性の理想化にほかならないであろう。つまり、現実の女性に神話的人格を与えること。——そうすることによって、希求され、祈念され、空想されたものは、女性なるものの天上的イメージにほかならなかったのである。

このような女神の現世的模写による女人讃仰の好尚はまた、より通俗的な形で、唐代にも受け継がれることになる。その間の経緯を陳寅恪は簡潔にこう説明している。<sup>(5)</sup>

六朝人は、仙女杜蘭香・萼緑華の俗縁を盛んに語った。それが流伝して唐代に至り、仙（女性）の一名は、妖艶の

婦人、あるいは風流放誕の女道士の代称として多く用いられるようになり、ついには、それを以て娼妓と目する者もあつた。

これを要するに、すぐれて美しく悩ましい女人であれば誰でも、それを神女や仙女に見立てることなど、唐代ではすでに定型化した着想にすぎなかつたのである。

たとえば、これと同様の事例は、唐代艶情傳奇の中にも見いだされる。『霍小玉伝』の中で、媒婆が美妓小玉をほめそやして、「一仙人有り、謫サレテ下界ニ在リ」といつた遣手風の口吻をもらすのも、また『鶯鶯伝』の中で、ヒロイン鶯鶯の媚態をまのあたりにした張生が、「且ク神仙ノ徒カト疑ヒ、人間ヨリ至レルヲ謂ハズ」と讃嘆するのも、陳氏のいわゆる「仙の一名」と同断の着想である。

ここに、神婚説話の残存を認める論者も少なくない。が、それが遠い神話の無意識的自覚か、それとも単なる暗喩か、にわかには判定し難い。いづれにしても、このように「仙」という譬喩を用いることで、人間的な恋愛の表現が、天界のものに対する讃仰の念に転位されることになる。また、そうすることによって、本来なまぐさい人間的な愛の行為は、秘儀化されるかも知れない。だが、それは全く紋切り型の修辭的なものである。

してみると、そういう隠喩もしくは象徴の格下げは、神話的空想の衰えを示すとともに、神話自体が墮落し、世俗化した結果にほかならない。

その極端な見本が、張文成の『遊仙窟』であろう。あからさまに言えば、顛落して人間の享樂の対象となりさがつた女神の、あらゆるない姿がそこにある（仙女十娘が遊女に擬せられるゆえんである）。

このように、古い神話と新しい世俗（遊里）との奇妙な混淆のために、『楚辭』より來源する、夢幻的幻想的な神婚

説話の形態も、ここでは恣に歪められていると言つてよい。古い神話は、新しい物語のはなやかさに奉仕してゐるにすぎないのである。

だが、それはまた、新しい一つの型を示していた。なぜなら、怪奇幻想風なものから物語風なものへと、興味や関心の対象を移行させているのが、唐代小説に著しい傾向の一つだからである。

なるほど、唐代伝奇は六朝志怪の後を襲うものだが、このジャンルに与えられた呼称が、「奇を伝える」という意味にもとづくことは、その内容と形式に明確な特徴を与えているように思われる。

伝奇全体を通観すれば、その「奇」なるものとは、奇異なこと特異なことを意味し、それはおおづかみに言つて、志怪同様、超自然の事柄に属しているが、二義的に現実のめずらしい出来事をも包括している。いや、むしろ、現実の特異な事件を幻想や空想の領域にまで拡大することによって、物語にある種のふくらみをもたせるのが、このジャンルに特有な仮構の手法の一つだった。

たとえば、竜女との愛の物語『柳毅伝』、狐妖との恋の物語『任氏伝』などを見るとよい。これらの物語は、唐代小説に普遍的に見られるテーマの一つだった異類婚説話に想を得たものだが、その中で、主人公たちの恋愛は、本来相手の女性が異形のものであることを除けば、現実のものと同ら変わるところがなく、終始人間界の法則に従っている。この世のものとも思われぬ美貌にめぐまれた女主人公たちは、かりに魔力を使えばどんな悪性さえ犯すことができる筈なのに、彼女たちははしかし、そのような非人間的な魔性の美的存在ではない。彼女たちはあまりに人間くさく、時には人間の女より善良でさえある。逆説的に聞えるかも知れないが、この種の物語では、人間の女性ではなく、かえつて異類の女性においてこそ、女らしい美德が達成されているのである。たとえば、常に滄らぬ情愛とか、捨身の献身とか――

つまり彼女たちは、人間の女性には稀にしか望みえぬ、ある美しいものの化生なのである。

そして、そこに唐代伝奇の豊かなローマン性があつたと言つてよいだろう。よく唐代伝奇は、中国のローマンの発祥と言われるが、以上にあげた数例から見ても、それは神話・伝説・民譚・説話などに材を取ることが多かった。この辺りにも、唐代伝奇がアネクドト的な志怪小説から成長してきた痕跡を認めることができるが、しかし、そこに融通無碍な荒唐無稽さはあつても、神秘主義的な要素は稀である。

ファンタスティックなものからロマンティックなものへ——これはまた、志怪から伝奇にいたる過程に見いだされる、ジャンル上の法則でもあつた。

したがつて、こうした傾向をさらに推し進めれば、作者の興味もおのづと、現実の小説的な出来事にも向けられるはずである。

いま恋愛の主題に限つてみても、小説の関心は、彼岸の恋から現世の恋へと、ごく自然に移行してゆくはずである。もはや神女でも異類のものでもない世俗の恋人、そして、異郷でも仙境でもなく、市井において叶えられる逢瀬。——

つまり、現世の愛の主題は、やがて才子佳人という気持よく整つた様式として、文学の中にあらわれるようになる。

ここに至つて、中国の小説は、純然と世態人情を描きはじめ、生身の男女の眷恋を描くことによつて、人間性の淵へ新たな一石を投ずることになる。

### 三、伝奇の勃興

唐代伝奇のほんとうの季節は、上述の『遊仙窟』におくられること約半世紀の後、つまり代宗の大暦年間（七六六—七

九) あたりから始まる。

それはしかし、唐朝政治の大転換期となった安史の大乱(七五五—六三)以後のことであり、この王朝の興隆とともにあつた唐詩の盛行にくらべると、唐代伝奇はまことに多難な時代に出発したと謂わねばなるまい。黄梁一炊の夢をはかなんだ、沈既済の名高い伝奇『枕中記』などは、この空前の王朝を支えた官僚主義に対して、秘かな失望と諦念を吐露している。容貌魁偉の混血児、安祿山の謀叛によって屋台骨をゆるがされた唐朝は、以後ついに頽勢を挽回することはできなかった。

にも拘らず、かかる時代の変動は、新しく興つた伝奇というジャンルにとって、必ずしも不幸とは限らなかつた。

なぜなら、まず第一に、この大乱以降、従来の宮廷貴族の権威の衰微に乗じて、いわゆる科挙出身の新興士族の政治的進出がめざましくなること。伝奇の作者たちは、おおむねこの階層に属しており、多くの文学史家が指摘するように、このジャンルの勃興は、そうした新しい気運と無縁ではない。

そして第二に、唐朝の政治的衰退とは別に、商業市民の抬頭にともなう都市生活の向上、ならびに享楽機関の発達にしたがつて、巷間に洗練された享樂的な文化が栄えたこと。

なかんずく、盛時には人口百万を超えたという国都長安のごとき大都市は、おそらく当時の世界に比類を見ないものであるろう。すでに古典的な完成を遂げていたこの都市は、唐代に至り、商工業の発達によって促された都市経済の伸張につれ、かつてないほど活発な都市生活をくりひろげる。唐代の文化とは、この首都長安の文化であると言っても、おそらく過言ではないだろう。その国際都市的性格において、とりわけそうである。各国からの来唐者は、多くこの首都に湊集したが、その繁華を極めた都市の景観は、唐朝の国家経営の規模の大きさを、四海に誇示するにふさわしいもの

であったと想像される。

云うまでもなく、頻繁な交易は、あまたの物資を流通させ、あまたの人間を移動させる。めまぐるしく生産と消費を繰り返す都市経済の発展はまた、世界像の飛躍的な拡大をもたらした。都大路には、諸外国から訪れた商人・遊芸人・留学生・外交使節などが足繁く往来し、市場には、各地から集められた珍らしい物産があふれ、歓楽街では、西域渡来の管絃の音がさざめき、時世粧の胡姬がしなを作る。おそらく、こうした過剰と氾濫は、都の人々に停滞を許さなかつただろう。

当然、かかる新しい生活の内容や事実は、それを盛るにふさわしい新たな形式または様式を必要とするはずである。一般に文学は、小説の出現によって、人間や社会を描く可能性を高めたが、この公式どおり、新たに興隆した都市の間観世界観を盛りこむのに適していたのが、雅文短編という形式ながら、伝奇と呼ばれる小説のジャンルだった。

げんに伝奇の登場人物は（端役まで含めると）、官吏・書生・商人・職人・娼優・遊治郎・外国人・無頼または任侠の徒、はては乞食・犯罪者にいたるまで、極めて多彩だが、これらの人々は、都市の雑踏の中に容易に見いだせる人々であって、つまり、こうした雑階級の集団の形成が都市というものであり、ここに人間の豊富な生が、きらびやかに展開される。

その点で、伝奇の多くの作品に、背景を、題材を、そして生命を与えているのは、都市の多様な生活であった。おそらく、小説と風俗（ひいては都市と文学）との交渉の密切さにおいて、唐代文学は、その最初の開花期にあたると言えるだろう。

このように、都市生活の余剰は、この伝奇という小説のジャンルの発生を促したが、それとともに逸してならないの

は、新興知識人たる伝奇作者の大半が、都市生活者あるいはその経験者だったことである。彼らは皆が皆（と言ってよいほど）、弱年ないし壮年の頃に、高等文官試験受験のため、出京もしくは在京した経験の持主だった。学問もあり、また若い進取の気象に富んだ彼らが、そこでじかに触れたものは、活気に満ちたはなやかな都市の空気である。さらにまた、比較的行動の自由にくぐまれた遊学中の彼らは、都会の享樂的な文化、娛樂の享受者であった（これについては、後で触れる機会があるだろう）。ともかくも、このことは、伝奇小説のある種の作品の形態を、はなやいだ都會的なものにしてゐる。

さて、ある意味で、叙上のことを最もよく具現しているのが、佳人才子の風流韻事を描くところの、いわゆる艶情伝奇の諸作品である。

これらの小説は、はなはだ情緒的な恋愛を描いているけれども、その物語が円満な終局に導かれるにしろ、あるいは不本意な終局に導かれるにしろ、ここではもう超自然の力を借りて目的に達することはない。他の志怪風の作品とは違い、小説の構成は、荒唐無稽な筋によって無理強いされることはない。いづれも小品ながら、プロットの起伏は、邂逅・別離・再会といった、いわば短編小説的な人事の偶然によって操られている。<sup>(6)</sup>

たとえば、唐代伝奇中、最も波瀾に富んだ物語『李娃伝』を例に引こう。

才貌ともに傑出した常州刺史築陽公の息子は、科挙受験のため出京したが、ほどなく長安の名妓李娃を見初める。この芸妓に入れあげた青年は、潤沢な学資を蕩尽した挙句、女からも見限られ、路頭に迷って、ついには乞食にまで身を落す。だが、偶然青年と再会した李娃は、前非を悔いて彼を窮地から救い、学業に専念させ、科挙に優等で及第させる。やがて二人はめでたく結婚する。

以上はごく粗略な梗概にすぎないが、この中で注目に値するのは、人間の運命を左右する力として、お金が決して小さくない役割を担わされていることである。この甘かされたばつと出の青年は、「百万ト雖モ何ゾ惜マン」と、少しも出費を惜まなかったために長安の名妓と馴染み、その結果、資財蕩然として女から見棄てられる。その後、青年はさまざまな辛酸をなめることになるが、結局、直で勝気な李娃の、健気な献身によつて、このいささか優柔不断な青年は立ち直った。こうして最終的に、人間の運命は人間の手の中に取り戻されたのである。

それでは、このように合理的な精神は、どこに由来しているのだろうか。

もちろん、伝奇の担い手であった新興知識人の、既成の習慣・道徳に囚われない、旺盛な進取の気質もさることながら、それはすでに明かなように、都市の人間観世界観に根ざしているものと思われる。迷信とか、因襲とか、頑迷固陋なものから遠い精神——それは甚だ實際的な力、すなわち経済によって律せられた都市の生活の中から生まれてきた精神にほかならないからである。

#### 四、経済と好色

以上のような前提に立って、あらためて才子佳人の主題を見直すとき、その発生の基盤がいっそう理解しやすくなる。そのためにも、ここで、『柳氏伝』、『霍小玉伝』、『李娃伝』、『鶯鶯伝』の諸作につき、その人物造型をひとわたり検討しておくのが筋だらう。

まず才子とは、何よりも人に抜きんでた詩文の才を有すること。

昌黎ノ韓翊詩名有り、……韓秀才文章特異、……明年、禮部侍郎楊度ハ翊ヲ上第二擢キンデシモ、屏居シテ歳ヲ

聞ツ、(柳氏伝)

隴西ノ李生名ハ益、年二十ニシテ、進士ヲ以テ第二擢キンデラル、其ノ明年、拔萃セラレテ、試ヲ天宮ニ俟ツ、：

：生ハ門族清華、少クシテ才思有リ、麗詞嘉句、時ニ無雙ト謂ハレ、生達丈人、翕然トシテ推服ス、(霍小玉伝)

偉郎ニシテ詞藻有リ、迥然トシテ羣セズ、深ク時輩ニ推伏セラル、：：：郷賦秀才ノ擧ニ應ジ、：：：生モ亦自負シ、

上第ヲ視ルコト掌ヲ指スガ如シ、(李娃伝)

張大イニ喜ビ、立ドコロニ春詞二首ヲ綴リテ以テ之ニ授ク、：：：明年文戰勝タズ、張遂ニ京ニ止マル、(鶯々伝)

云うまでもなく、才子の「才」がさまざま明確に詩文の才を指すことは、唐代文学推進の原動力となつた貢擧の制と無関係ではありえない。したがつて才子とは、おおむね当時の知的選良であつた進士、もしくは科擧及第をめざす若い書生の謂であつた。

孔子以来の文の尊重、加わるるに、有能な士君子の政治への参画といった理念は、唐代に至り、科擧によつて制度化されたが(もつとも、古典的な意味で、官僚制は漢代すでに一応の完成を見ていたが)、爾来、文人官僚は、恒久的に社会のエリートでありつづける。このことは謂うなれば、中国文明社会の特殊性であり、その意味で、男の典型的理想として「文」が尊重されたことは、この種の小説において、きわめて中国的な特色となる。

この他にも、才子らしい特徴をあげると、彼らがいわゆる風流を解する才覚の持主であるということである。それは才子という美的生活者に欠くことのできない資格である。が、その趣味性は、男の好き心と一脈相通じている。たとえばこんな風に。

風流才子春思多シ、(鶯々伝)

毎ニ風調ヲ衿リ、佳偶ヲ得ンコトヲ思ヒ、博ク名妓ヲ求ム……(霍小玉伝)

結局それは、有り体に言つて、佳人の華容婀娜の態を愛づる溫柔の才賦であり、したがって、そこに禁欲的要素はほとんど見あたらない。

一方、佳人とは、そうした才子の熱い注意をひくために、もちろん絶世の美女でなければならぬが、概して娼妓か、それと覚しい女たちだった。

其ノ幸姫ヲ柳氏ト曰ヒ、豔ナルコト一時ニ絶ス、談諧ヲ喜ビ、謳詠ヲ善ス、(柳氏伝)

姿質穠豔、一生未ダ見ズ、高情逸態、事人ニ過グ、音楽詩書、通解セザル無シ、…妾ハ本倡家、(霍小玉伝)

泝國夫人李娃ハ、長安ノ倡女ナリ……妖姿要妙、絶代未ダ有ラス、(李娃伝)

顔色豔異、光輝人ヲ動カス、(鶯々伝)

ここで再び、『遊仙窟』の場合と同様に、娼妓の問題に立ちいたるのも、あながち偶然とは言えない。

それと言うのも、恋愛そのものが大びらに認められていない社会では、結局それが遊戯的な見せかけにすぎないにしても、恋愛の自由があり、かつ男女が対等に渡り合える場所といえは、遊里においてほかにありえなかつたからである。つまり妓女たちは、恋愛のエキスパートであった。のみならず、当時の花柳界がかえって、魚玄機・薛濤の閨秀を生みだすほどに、洗練された場所でもあった。こうした事情を考えあわせると、才子の敵娼あるいは匹配として、彼女たちは決して役者不足ではないだろう。じじつ、才智・容貌あるいは詩文・音曲の才を以て一世に鳴り、賢雅の士の眷顧をこうむった女たちも、唐代には決して少なくなかったのである。

さて、右のような次第で、好一对の理想的男女の組合せが成立し、そして、かかる男女のむつみあう物語の典型的な

様式が生まれた。

しかし、このような才子佳人の艶情の概念は、まず、物語の中にあらわれたというより、当時の社会の花形であった進士と妓女との生きた現実の關係として存していた。

その具体的事例は、当時の詩文あるいは数種の記録の中に断片的に見いだされるが、このさい参考になるのは、魯迅の以下の指摘であらう。

唐人は科挙及第の後、多く花柳の遊びに興じた。それが風習となつて伝わり、佳話と考えられた。だから妓家の故事は、文人もままこれを篇章に著わした。(『中国小説史略』第二十六篇)<sup>(8)</sup>

右の所論は、唐代の進士妓女の風流歛会のありようと、それが文学に及ぼした影響について、簡潔に要約していて間然とするところがないが、実際に、中晩唐期に及んで、そうした進士浮華の風潮は、一種の時代現象とも称すべきものだった。唐末の翰林学士孫攄は、『北里志』の自序の中でこう述べている。

大中ヨリ皇帝儒術ヲ好ミ、特ニ科第ヲ重ンズ、(中略)故ニ進士此ヨリ尤モ盛ンニシテ、曠古無儔、(中略)是レヨリ僕馬豪華、宴游崇侈、

唐代、進士科(科挙の一種)は、士林の華選であり、あまたの穎才がこの門より輩出された。李肇の『唐国史補』にもいう、「進士ハ時ノ尚ブ所ト為ルコト久シ矣、是ノ故ニ俊父實ニ其ノ中ニ集ル、此レ由リ出ヅル者ハ、終身文人為リ」と。それだけに、登第に得意絶頂の輩が、侈靡の風に流されるのも、また止めがたい趨勢だったかも知れない。彼らは、いささか時代に甘やかされていたのである。

ところで、前掲の『北里志』は、「風流の藪澤」<sup>(9)</sup>と喧伝された大唐長安の艶跡、平康坊に関する逸事を録したもので

あるが、それによると、当時の有力な嫖客は、官僚・举人（科挙受験生）ないし新及第者、および富商の三種に大別される。客筋が官僚・富商であったことは首肯されるにしても、ここでいささか興味を覚えるのは、新及第の進士たちが、盛んに遊里に出入したという事実である。それは一つの語り草であつたらしい。たとえば、『北里志』の作者は、そのエピソードをこう伝えている。

裴思謙状元及第ノ後、紅牋ノ名紙十數ヲ作ツテ、平康坊ニ詣リ、因ツテ里中ニ宿ス、

鄭合敬先輩及第ノ後、平康坊ニ宿ス、

これと同種の逸話はまた、王定保の『唐摭言』、王仁裕の『開元天宝遺事』にも散見する。<sup>(10)</sup>

このことから、当時に昇しつゝあつた新興知識人の間に、一種の遊び人氣質がめばえていたどうか、いまは速断を慎しむが、ここで最も人目をひく現象は、新及第の進士たちが、自分の成功の最も甘美な確認のために、いさんで遊里に赴いたということである。高級官僚のキャリアを約束された彼らは、その中で遊蕩三昧に耽つたし、またそうすることも許容されていた。「曲中ノ常價、一席四鑽、燭ヲ見レバ即チ倍ス、新郎君ハ其ノ數ヲ倍ス」（北里志）。つまり新及第者は、遊里の上客であつた。彼らの遊興費は、普通より数倍も高かつたからである。

こうした唐代の進士たちの、華かな狎妓遊宴のありようと、唐代艶情伝奇との関連については、すでに幾人かの研究者によって指摘されているが、このことはまた、才子佳人の愛の様式を、ある程度規定していると言えるだろう。

翊ハ柳氏ノ色ヲ仰ギ、柳氏ハ翊ノ才ヲ慕フ、（柳氏伝）

小娘子才ヲ愛シ、鄙夫色ヲ重ンズ、（霍小玉伝）

いわば、これが才子佳人の典型的な愛のありかたである。ここに「仰色」といい、「重色」という、それを「好色」

と言ひ換えてもさしつかえないだろう。それゆえに、閨閣の事は、多く遊蕩的な情緒として扱われることになる。その点、溫柔の性を賦与された才子の心を啖るものは、常に佳人の色なのである。

ともあれ、このように、本能充足の場である遊里が、この時代の小説に富豊かな題材を提供しえたことの背景には、もちろん当時の花柳界の発達があった。再び『北里志』について見ると、唐代の都市経済の急速な成長と相俟って、中晩唐の頃には、遊里はすでに充分な発達を遂げていた。「費ス所ヲ恠マザレバ、則チ下車水陸備レリ矣」(北里志)。要するに、この世界では、出費さえ惜しまなければ、酒色ともども、思いのままに堪能することができたのである。

経済と好色——云うまでもなくこの二つは、遊里を基底から支える二つの主軸である。唐代の爛熟した都市文明は、たとえば『北里志』に見られるような大規模な遊里の発達を促した。そして、そこに簇り集ったのは、官僚・举人・進士・富商といった時代の選良たちである。つまり、譬えて言うならば、遊里とは、時代の繁栄と同衾した、特殊な風俗だった。その華美な、しかも美的情趣に富んだ風俗に対して、小説は決して冷淡ではいられまい。

## 五、立身と愛と

『枕中記』という伝奇がある。「邯鄲の夢」あるいは「黄梁一炊の夢」として知られる、あの有名な故事である。

ところで、この物語の中で、ひとくさり身の不遇をかこった若い盧生が、胸中にわだかまる青年らしい抱負を、道士呂翁にこう告げるくだりがある。

士ノ世ニ生マルルヤ、當ニ功ヲ建テ名ヲ樹テ、出デテハ將入リテハ相、鼎ヲ列ネテ食ラヒ、聲ヲ選ビテ聽キ、族ヲシテ益々昌エテ家ヲシテ益々肥エシムベシ。

ここに嘔出されているのは、熾烈な立身出世の願望である。出世のあかつきには、美食をくらい、美妓の歌声に聴きほれるのだという。我々ここで、すでに見たように、遊里に刺を投じてその中を遊蕩したという、あの新及第の進士たちの稚氣を想い出さないだろうか。まずは進士に挙げられること、これが「盧生の夢」における栄華のはじまりであった。おそらく、右のような盧生の口吻は、科挙及第をめざす、当時の新興士人階級の、一般的な青年の抱く立身出世主義思想を、はからずも代弁したものにちがいない。

よく言われることだが、生きることを選ぶことは、往々にして立身出世を望むことである。そして、多くの人にとって、立身出世を願うことは、社会に重要な役割を果し、その見返りとして、名誉や地位を手に入れ、世間から尊敬を買う、ひとかどの人物になることである。

どこの国でも、事情はそう変らないだろうが、中国では古くから、官僚になることは、富を得ることに等しかった。「升官発財」という言葉もあるほどである。高官にのぼれば、財産も名誉も地位も権力も、一挙にもたらされるのだ。ましてこの国の知識人は、儒教の理念によって、ほとんど官僚たるべく運命づけられていた。

しかも、唐代の知識人にとって幸便なことに、隋代に創設された科挙の制度は、この短命な王朝の後を受けた唐朝にも踏襲され、それは制度としてさらに整備拡充されていた。

元来この制度は、門閥貴族に対抗するため、それに替る新たな人材を補給するシステムとして開設され、あくまで原則的な話だが、門戸を広く世に向けて開いていた。

この登竜門に集ったのは、多く名族の子弟たちであったが、寒門の子弟の員数も無視できないほどだった。中唐の韓愈、白居易などは、寒門より出でて高官にまでのぼった典型的な文人官僚の例である。貴族全盛の六朝時代ならば、齒

牙にもかけられなかったこれら寒門の若者たちにも、榮達の道は開かれている。

したがって、この時代の立身出世主義思想には、これら若き俊英たちの、主流の価値観が反映していた筈である。ちょうど、我が明治時代の立身出世主義思想が、青年たちのモラルに支えられていたように。

もっとも、そこに大きく功利が働いていたのも事実である。それは、声高に經世済民を説く立身出世主義思想に、常につきまとう影のようなものである。おそらく、国家有用の人材を募るといふ科擧の理念も、あのいささか功名心にはやった盧生のような若者たちによって、支持されていたであろう。

これは再三述べてきたことだが、唐代伝奇の担い手は、そうした新興士族であった。だが、多くは官途にめぐまれぬ知識人であった。

それゆえに、このジャンルには、多かれ少なかれ、また良かれ悪しかれ、任官に野心を抱くこの階層の嗜好が、反映していることは否めない。

もとより才子佳人の物語も、その例外ではない。いや、むしろかえってよく、この階層の嗜好が投影されていると言つてよいだろう。

そもそも、これらの物語の最大の関心事が、立身と愛をめぐる問題であった。

しかし、この二つは何時も、両立するものだろうか。

もちろん、愛を全うした女もいた（例えば李娃、柳氏のように）。だが、その反面、男の立身出世の犠牲になった女もいた（例えば霍小玉、崔鶯鶯のように）。これらの物語では、愛の叙述はともすると、薄命な佳人の方に傾きがちだ

が、彼女の愛の勝利も敗北も、詮ずるところ、立身か愛かという二者択一にかかっている。

才子の方はいい、いずれ社会は彼を官吏として必要とするだろう。だが、女たちはどうか。すでに前節で検討したとおり、佳人とは、おおむね賤業に従事する女たちだった。そして、このことは常に、彼女たちの愛を阻むことになる。男たちは官僚としてのキャリアの利益のために、多く名族の子女を娶るのが通例であったからである。そこで、身のほどを知った女たちは、恋人に向ってこう打ち明ける。

豈宜シク濯洗ノ賤ヲ以テ、採蘭ノ美ヲ稽ムベケンヤ、(柳氏伝)

妾ハ本倡家、自ラ匹ニ非ザルヲ知ル、(霍小玉伝)

中外婚媾、自ラ黷スコト無レ、(李娃伝)

この夏炬冬扇の懸念、自らの賤業ゆえに、男の出世の妨げになるまいと願う女の意識。そのありようを通じて、男の属している社会の一端がたまたま透けて見えるのも、この両々相容れることの困難な、立身と愛との問題のためにほかならない。

それにしても、これら才子佳人の物語の判りやすさは、どうしたものだろう。

多くの場合、これらの物語は、そう複雑な手だてを必要とする訳ではない。将来有望な青年がいて、たとえようもなく美しい女がいれば、それだけでもう物語は始まる。そしてこの二人が、凡人に望みえぬような恋におちれば申し分ない。彼は才子、彼女は佳人、これほどまでに単純化された二つの類型のために、人間関係は複雑にもつれるということがなく、このため小説の構成は判然としたものであり、むしろ、いささか整いすぎたきらいがないでもない。

さらにまた、この場合に見落せないのは、唐代伝奇の作者と読者が同じ一つの階層に属していたということである。

伝奇の勃興が、韓柳を領袖とする中唐の古文運動と呼応していたことは、すでに文学史の常識だが、伝奇の文体はつまり、この由緒正しい文言であった。この古文という文体自体が、中唐以後に実力を蓄えつつあった新興知識人の専有するところであった。このことはすなわち、唐代伝奇文壇なるものが、出目、教養、生活様式を同じくする仲間うちの、ごく限られたものであったことを意味する。

このため、作者と読者は、相互の趣味・嗜好を知悉していたし、その意味で、両者の関係は、はなはだ風通しのよいものだった。それゆえに、伝奇作者の人間観、社会観も、決してこの階層の埒外にあるものではない。

もちろん、人間の典型を描くことは、小説の本筋である。しかし、そのように限られた社会では、人間の類型はたやすく典型化され、そして普遍性を獲得する。したがって、当時の進士と妓女という二つの社会的なタイプも、単純に才子佳人の類型にあてはめられ、これら才子佳人の奇縁も、多く立身出世主義の枠組の中で語られているにすぎないのである。おそらく、これらの物語が判然と整った構造をもち、類型化されやすい性質をもっていた潜在的な原因は、ここにあるだろう。

それはともかく、唐代の爛熟した都市文明は、伝奇という小説のジャンルの水準を高める条件を準備していたかに見える。しかし、その後の伝奇の発展に見るべきものは少ない。もっとも、宋代にも数多くの伝奇は作られたが、それは公平に言って、低迷不振におわったと言ってさしつかえない。むしろ中国の小説は、単一な知識人階級の手を離れて、たとえば宋代、盛場で大衆に物語を語って聞かせた説話人が登場するに及んで、新たな展開を示しはじめる。つまり、古文という文体の重荷を棄てたとき、新たな一步を踏み出すことになる。そうした意味においても、唐代伝奇は、唐一代に花開いたジャンルだったのである。

## 六、おわりに

しかし、小説の主人公として、才子佳人のように一般の人性を備えた男女を選んだことは、唐代伝奇作者の手柄の一つだった。そして、この唐代艶情伝奇が後世の戯曲小説に与えた影響は、並々ならぬものがあった。

唐代以後、この才子佳人の主題は、次の二様のタイプに分かれて発展してゆく。すなわち、若き書生と妓女、あるいは良家の子女との、二つである。いずれにしても、才子佳人の愛の様式は、女を描きつつ男を描く技法として、最も完成されたものとなる。

しかし、後世のいわゆる才子佳人小説は、絶えざる繰り返しで、そのロマンティックな筋書を幾重にも反復しているにすぎない。この常に漱らぬ形式的な主題。むしろ、このような才子佳人小説者流の優柔不断を棄却することによって、たとえば『金瓶梅』のように凄味のある小説が、明代に忽如として現われる。この時代における才子佳人小説の流行を念頭におくとき、それはあたかも、並いる才子佳人の生温さを嘲笑しているかの如くである。

それにしても一体、このように常套にすぎた主題が、中国人の心にどんな感興をもよおさせるのか。

これらの物語の異常な成功から見ても、それは万人の心を動かさずにはおかない魅力をもつものらしい。そしてまた、このことは、中国人のポピュラリティーと深くかかわっているはずである。ちょうどこの国で、ハッピー・エンドの物語の異常な人気が、人々の熱狂的な喝采に支持されているように。

私があらためて才子佳人の主題と取り組んだのも、なぜそれがかくまで愛好されるのか、という問いかけに端を発する。本稿はしかし、その問いかけにじゅうぶん答え切つてはいない。その愛好の理由の解明は、今後の宿題として残さ

れている。

註

(1) 塩谷温博士は、『中国小説の研究』第三節において、唐代の小説を、(一)別伝、(二)劍俠、(三)艶情、(四)神怪の四種に分類されている。本稿は便宜上、この分類に従っている。なお同博士は、艶情類の作品として、以下の五作を挙げておられる。すなわち、『霍小玉伝』(蔣防撰)、『李娃伝』(白行簡撰)、『柳氏伝』(許尧佐撰)、『鶯鶯伝』(元稹撰)、『遊仙窟』(張文成撰)の五つである。

(2) 唐代艶情伝奇の主人公たちを、単純に「才子佳人」と呼ぶことに、いくぶん躊躇を覚える。なぜなら、作者が明確にそれと意識したという証拠が見当らないからである。おそらく、この呼称は後世のものである。しかし、他によい呼び名を思いつかないので、ここでは便宜上、「才子佳人」という言葉を用いることにする。

(3) 引用は、王辟疆校録の『唐人小説』によった。なお、以下の唐代伝奇の引用もこれによった。

(4) 『山海経』は、中国古代神話の宝庫であるが、その制作年代を確定することは、はなはだ困難である。しかし、古代神話研究に欠せない重要なテキストであることは間違いない。また、『漢武内伝』は、後漢の班固の作と伝えられているが、それは後世の偽託であり、おそらく魏晉の作であろうと言われている。なお、『漢武内伝』の西国母に関する主だった記述は、以下のとおりである。「祝之可年三十許、修短得中、天姿醜澁、容顏絶世、真靈人也」

(5) 「讀鶯鶯傳」、『陳寅恪先生文史論集』下卷所収。

(6) もっとも、『霍小玉伝』では、男の負心を怨んで死んだヒロイン小玉のたたりで、その後、男の夫婦生活が円満にゆかなかつたように描かれている。これは、唐代艶情伝奇の中で、唯一見いだされるミステックな部分である。しかし、この小説の構成において、それはさほど重要な場面ではなく、単なる後日譚にすぎない。

(7) この小説では、ヒロイン鶯々は、唐代の名家の一つ崔氏の人という事になっている。だが、本稿にとって好都合なことに、鶯々は実は妓女であったという説がある。それに先鞭をつけたのは、おそらく陳寅恪の論文「讀鶯鶯傳」であろう。劉開榮の『唐人小説』(第五章)、李長之の『中国小説史稿』(第三卷)も、陳氏の説に従って、鶯々を娼妓と見なしている。

(8) これとはほ同様の論旨だが、張亮采の以下の指摘(『中国風俗史』第三編)もまた、有益である。「且自六朝以来、士大夫

挾妓飲酒賦詩、本屬尋常之事、唐代重視進士、進士之所翫狎、當時并傳爲佳話、故進士贈妓之詩、唐人獨多」

(9) 『開元天宝遺事』に見える。註の(10)参照。

(10) 本文に引用した『北里志』の記述と全く同様のものが、『唐摭言』(第三卷)にも見いだされる。また『開元天宝遺事』の

記載は、以下の如し。「長安有平康坊、妓女所居之地也、京都俠少、萃集于此、兼每年新進士、以紅牋名紙、遊謁其中、時人謂此坊、爲風流藪澤」